

とうっ
塔
塔
塔
塔
塔

作者さんや読み手さんの声は
<http://www.columnland.net/> にてどうぞ

頂点に挑み続ける者たちがいた・・・

プロダクト・オブ・ア・ 「傾城者たち」

あきらめられた伝統

「いまや時代はカニマヨ」

「だって具とかすくないしいー」

「俺たちの力で、最高を目指さないか」

再び集まる材料たち

驚きの現場

目指すは三十センチ

そびえたつパン生地

ピラミッド式

「チーズが一番下じゃ、傾いちまう……」

「屈辱のあだ名」

「結局お前らじゃ、チキテリには勝てないんだよ！」

「君は大葉じゃない！バジルだ！」

トマトのゆうき

(有機)

意外な味方、パイナップル

逆転の発想

最後の切り札、「耳」

「予熱が終わるまで、あと5分・・・」

「立つか、『ザ斜塔』オープンの天井に挑め」

夏の終わりと塔の終わりと僕らの始まり

「もう役目を終えちゃうかも知れないんだよ？いくしかないっしょー！」

そんな彼女の適当な言葉に乗せられて、僕は東京タワーに来た。地デジ云々でスカイなんたらに役割を奪われてしまう「かもしれない」らしい。決まってからでもいいんじゃないのかなあ、と思いつつも、この半年間彼女に鋭意片想い中だった僕としてはそんな誘惑に乗らないわけにはいかない。かすかな期待を抱きつつ、っていうかこれはデートでしょ！？と思いつながら向かったのだ。

「わーきれい」

定型句だなあ、と思いつつ、嫌われないように返す。

「そうだねーきれいだねー」

「そんな事思ってもないくせに」

見透かされてた。

「そんなに慌てなくてもいいよ、君のそんな適当なところ好きだよ」

「えっ、いまなんて」

「聞いてなかったのー？教えないよーん」

そう言って逃げられた。でもいま確かに……。

カフェで他愛もない会話をし、時間は過ぎていく。何か言ってくるのかな？僕から言うべきかな。僕から言うのを待ってる？そんなことばかり考える。

ああ、もうあと三分で、帰らなければいけない時間……。

「渡したいものがあるの。目をつむって？」

これはまさか……期待に鼓動が高まる。

！

今……唇にやらかいものが……？？

「ふふっ、まだそうやってんの？早くしないといつちゃうよー」

夏はもう終わったけれど、かけがえないものを手にした気がした……？

象牙の塔

とある町にある一人の学者がいた。

彼の研究内容は人間の「嘘」についてであり、彼は科学的に実証可能な嘘発見器の開発に日夜没頭していた。彼は25歳のとき、ひとつ下の後輩とともに研究を始めた。当時は誰もが嘘発見器などは空想上のものだと思っていた時代のことである。

しかし研究を始めて1年ほどした頃、その後輩が山中にて遺体で発見された。それは研究中の言い争いが発展しその学者が後輩を殺したものであり、警察もその学者に目をつけたが証拠不十分で起訴することができなかった。

その後の彼は今まで以上に世間との干渉を避け、研究室に引き籠もるように研究に明けくれた。元々研究に没頭する性格で、事件のことも相まって外の世界に出ない生活が彼には丁度よかったのだ。

研究を続け事件から4年後、ようやく嘘発見器を完成させたが犯罪捜査などの方面に活躍の場を持つものが故、さらに3年後の時効を待つことにした。人間、自分の成果や功績は人に認めてもらいたいものであり彼に残された3年間は何より長く感じた。しかし「捕まりたくない」という強い感情でその欲を押さえこみ、ついに3年が経過した。

そして待ちに待った時効成立。彼は弾むような思いで人生をかけた嘘発見器を発表した。そしてその性能は社会に広く認められ彼はその発明者として歴史に名を残したのであった。

発表からおおよそ1年後。警察から8年前の事件に関して彼の嘘発見器を用いた任意の取調べをしたいと申し出があった。彼は嘘発見器を自分に使ったことがなく、長い引き籠もり生活がゆえ世間体などもなかったのものでその取調べに応じた。内心、自分を時効まで逮捕できなかった警察を心の中で笑ってやろうと思いつつ嘘発見器の前に座った。

・・・そして取調べは1時間ほどで終わり、警察官は言った。

「8年前の事件について、殺人容疑で逮捕します。」

彼は驚き、声を荒げて言った。

「俺の時効は事件から7年だ！去年で時効は成立している！」

それに対し警察官はこう言った。

「2年前の法改正であなたの時効は10年になりました。あなたは外の世界に目を向けず研究室に閉じこもったからそれに気付かなかったのでしょうか。」と。

彼は嘘発見器の発明者として、殺人犯として2つ歴史に名を残したのだった。

夫は昔から不器用な人でした。

何か言いたいこと、言わなければいけないことも、上手く言葉にできないんでしょうか「む……」と呟くだけで黙ってしまふ、そんな人でした。

そんな夫の唯一とも言える趣味が山に登って、写真を撮ることだったんですね。付き合ってから初めてのデートでも彼が連れて行ってくれたのは、近くの山。プロポーズも当然の様に山の上にある展望台の上でされました。

そこは彼お気に入りのスポットらしくて、そこからの景色は、もう本当にありきたりで申し訳ないんですけど、宝石箱をひっくり返したような感じで、感動しました。でもね、聞いてくださいよ。あの人ったら、「あの、私と……む」って言って黙り込んだじやうんですよ、私それを見て吹き出してしまってますね、もうムードも何もあつたもんじやなかつたんですよ。結局いくら待っても、言い出してくれないものだから私から言っちゃいました、「よろしくお願いします」って。

やっぱりあの人は山に登り過ぎたんだと思います。ほら、バベルの塔の話があるじやないですか、あれみたいに言葉を見失っちゃったんじゃないかって。

そんな不器用な人と過ごす生活は、本当に特別なものじゃないかもしれないけど、子供も出来たし、私としてはとても幸せでした。休みの日に、しばしば一人で山に行ったり、家族を引き連れて行ったりしたのは少し困りましたけど。

あの大家族の写真とかは全然撮らないで、山の写真ばかり撮るので、一度聴いたことがあるんですよ、「私と山どっちが好き？」って、そしたらやっぱり「む……」と言ったきり黙りきつちゃうんですよ、ずるいですよねえ。

息子も思春期を通過するに当たって、少し父親を否定するような態度を度々見せましたけど、それも仕方の無いことです。元はと言えば、あの人が不器用過ぎるのがいいないんですよ、親が子どもを一番大切に思っているなんて当然のことじやないですか、それをちゃんと口にすればいいのに。そこはやはり駄目なところだと思います。

でも、息子も社会に出て気づいたんだと思います、自分の軽さと父親の重さを。あの人が定年した後、度々一緒に飲みに行ってるみたいです。でも、「いつもどんな話してるの?」と聞いてみても、「母さんとは出来ない話だよ」と言っただけで教えてくれないんですよ。

だから息子、ああ正人って言うんですけど。正人も残念がついていました。人目でいいから孫の顔を見せてあげたかったって。

やっぱり何だかんだで人間って、弱いものですよ。ちよつと体調が悪いとか言い始めたら、直ぐでした。

それからしばらくは、私も本当に落ち込んでしまつて、正人に言わせればそのまま後を追ってしまひそうだったって。うん、でも今はこうやつてあの人のことも普通に話せるようにはなりました。少し時の流れというのは残酷なような気もします。

この前、亡くなって随分経つので、あの人の部屋を大々的に整理することになりました。押入れを開けてみたら、出るわ出るわ、凄い量のアルバムが。そして、どれもこれも山なんですね。近くの聞いたことあるような山もあれば、私が聞いたことも無いような山まで。全部で二十冊くらいしら。

ああ、あの人は本当に山が好きだったんだなって再認識しました。ちよつと年甲斐もなく嫉妬しちゃいますよね。一、二冊見て閉じちゃいました。でも、捨てるわけにもいかないの、適当に二つに分けて、片方は私が貰つて、もう片方は正人にあげることにしました。

部屋を掃除し終えると、何だか本当にあの人がいなくなつてしまったんだ、ということがじんわりと沁みてきました。

本当にお疲れ様でした。私は幸せでした。そう、呟いてみて、自分でその響きに納得してしまいました。そうです、私はかなりの幸せ者でした。

それから数日後のことなんですけど、正人から連絡が来たんですね、「母さんの写真がたくさんあるよ」って。

それは二十冊あったアルバムの中のたった一冊。私と正人だけを集めたアルバム。ただね、どれも隠し撮りなんです。私も正人も何か違うことに熱中していたり、他所を見ていたりで、大体私こんなの撮られた記憶ありませんもの。

でもどの写真でも私たちは、笑顔で写っていました。

何だか昔の答えを今返された気がします。

本当に、あの人は不器用な人でした。

雲に覆われた空の下で、私は古い塔を見上げた。それは今まで愛され世界を支えていた塔、そして捨てられた歴史の塔。あの透き通ったような蒼い空の下で全ては変わってしまった。

そうだ、話を戻そうか、あの日に。

空を守る塔

空はとても大きく、そして重いものだ。だから、空が落ちてこないように私たちはひたすらそれを支えていなくちゃならない。そうでなきゃ、私たちが押しつぶされてしまう。

だから、だろう。昔の人たちは、大きな、とても大きな塔を街の中心に作った。その偉大な遺産は私たちの代でも絶えず、街の中心で私たちを見守りながら空を支え続けている。

あるとき、どこかの国が叫んでいた。空は落ちてこない、と。支えているのだからそうだろうと思う。だけど、どうやら話は違うらしかった。支えていなくとも落ちてこない、その国の人は説いていた。私たちはそれを相手にはしなかった。だけど、一つ疑問が生まれた。空と塔の接点はどうなっているのだろうか、と。

少し経つと探索隊も結成され、塔の調査が始まった。建設当時の図面はすでになくなってしまっていたから、全ては手探りの作業だった。

一年が過ぎ、探索隊がついに頂上まで辿り着いたとの噂が街中でささやかれていた。そんなある時、塔の入口が重い錠で封じられる日が訪れた。

人々の疑問は渦を巻き、一つの推測を街を歩き回っていた。塔が支える『空』は存在しないのではないかと。

探索隊も口を閉ざし、二年が過ぎた。人々の疑念の渦はとどまるそぶりも見せていなかった。そして、ようやく重い口が開かれる。塔の頂上には何もなかった、と。

そう、塔が支えるものなどとも存在していなかった。そこには、もう空虚にたたずむ塔が存在している、ただそれだけだった。

街のみんなは今度はそう信じている。けれど、私は思うんだ。あの塔が守ってきたものは何だったんだろうって。少なくとも私の中では、この街になくはないものだと思っている。本来の役目なんて関係なしに。

疑問の渦の中で空を見上げると、いつもより少しだけ低く感じた。

報復

その塔は、町外れにあった。

高さは僕の通う四階建ての学校よりも少し高い程度で、壁面は古いコンクリート建築物に特有の濃い灰色をしていた。何の用途で造られたのか全く分からないその塔は、寂れたこの町にはひどく不釣り合いな存在感を放っていた。そして、その非現実的な存在感は、代わり映えない日常に飽き飽きしていた僕を惹きつけるには、十分過ぎるほどの魅力を持っていた。

夏休みも残り少なくなった八月の末、僕たちは肝試しを計画した。行先はもちろん、町外れの塔だった。親には友達の家で勉強をすると嘘をつき、廃墟であるその塔の中で一晩過ごしてやろうという、割と本格的な計画だった。参加人数は僕と達也と裕一の僅か三人だけにした。肝試しとはいっても、僕たちは結構本気で幽霊を見ようとしていたので、中途半端な気持ちのやつには来て欲しくなかったのだ。

そしてある日の夕方、僕たちは計画通りに割れた窓から侵入し、一階の隅の部屋に簡単なキャンプを設営した。キャンプというが大げさだが、屋内で雨の心配をする必要はないため、ビニールシートの上に荷物を広げただけのものだった。けれど、十二時間以上も塔内にいる予定だったから、一応のキャンプは必要だったのだ。そして次に、僕たちは塔内の様子を見てまわった。相当老朽化が進んだ塔だったから、暗くなる前に危険な箇所を特定しておかなければと判断したのだ。またできれば、幽霊が出そうな場所の目星をつけておこうという意図もあった。けれど想定していたよりも塔内内部は広くて、ちょうど最上階に來た頃にはもう空が橙色に染まりはじめてしまっていた。大型の懐中電灯は一階のキャンプに置いてきてしまっていたので、このままでは薄暗闇の中を歩かなく

てはならなくなると、僕たちは慌てた。しかしそれがいけなかった。ちょうど一個目の階段の踊り場にさしかかったとき、先頭を歩いていた裕一が廃材につまずいて転倒し、足をくじいてしまったのだ。相談の結果、唯一小さなペンライトを持っていた僕が、懐中電灯などの荷物を取りに、単独でキャンプまで戻ることになった。

そして一階まで戻った僕は、そこで誰かの話し声を聞く。誰もいないはずの塔の中で、確かに誰かが会話を交わっていたのだ。その唐突な他者の乱入に驚いた僕は、不覚にも持っていたペンライトを落としてしまった。すると、それは床をはねて塔の入口の方に向って転がっていき、そして会話の主たちの姿を照らし出した。そこにいたのは、決して幽霊なんかではなかった。見るからに粗暴な若い男が二人と、その二人に抱えられたまぶごったりしている女性一人が、乱入者の正体だった。けれどそれは幽霊以上に出会ってはいけない存在だったことを、僕はすぐに悟った。なぜならその女性の服が、無理やり乱暴されたことを示すように、ぼろぼろに切り裂かれてしまっていたからだ。女性が既に汚されたあげくに殺されてしまっていたのか、それともまだここで引き続き汚されようとしていたのかは分からなかったが、その現場を目撃してしまった僕が、見逃してもらえないはずだろうということだけは、残念ながら確かだった。男たちの怒声を背に、だから僕は必死で逃げだした。幸い陽はもう落ちきっていたから、塔のどこかに隠れれば無事にやり過ごせるかもしれないと、僕は考えたのだ。けれど、隠れる場所を見つめるよりも先に、途中で僕を待っている二人にこの緊急事態を伝えなければいけなかった。それで僕はとにかく階段を駆け上った。恐怖と焦燥で、胸がぎしぎしと痛んだ。殺されるのは怖かったが、それよりもレイプ魔なんかに殺されてしまうということが、僕には嫌だった。それならば、幽霊に殺

された方がずっと良かった。無機的な現実を嫌ってこの塔まで來た僕にとっては、幽霊という反現実的な存在に殺された方が、ずっとましに思えたのだ。途中なんども転んでしまい、両足が傷だらけになってしまっても、だから僕は走るのをやめなかった。

けれど、光源の有無はやはり致命的で、上階にいる二人のところにたどりつくよりもずっと前に、僕は男たちに追いつかれてしまった。右腕をつかまれ、そのまま床に押し倒されてしまったのだ。痛みよりも悔しさと目眩がした。振り上げられた男の拳が右頬に叩きつけられ、口の中が血の味で染まった。助けを呼ぼうとして、けれど考え直した。僕が黙ってさえいれば、あとの二人は助かるのではないかと思っただのだ。だから、僕は悔しさと怖さを無理やりに嚥下して、眼を閉じた。

しかしいつまで待っても次の衝撃は來ず、不思議に思った僕が眼を開くと、そこでは男たちのうち一人が、後ろから首を絞められて悶えていた。そしてもう一人は既に床に伏せていて、ぴくりとも動く様子はなかった。達也が助けに來てくれたのかとも思ったが、男の首を絞めている人影は達也にしては髪が長くて、それで僕は、首を絞めているのがあの女性であることに気付いた。

男が床に崩れ落ち動かなくなってから、僕は彼女に礼を言った。僕らを見捨てて逃げることもできたはずなのに、助けに來てくれてありがとう。すると彼女は、「別に、こいつらが憎かっただけだから」と呟いて、すぐに階段を下りていってしまった。そしてそれが、僕の聴いた彼女の唯一の言葉だった。僕が上階の二人を連れて一階まで戻って見たとき、彼女は既に死んでしまっていたのだから。しかも、恐る恐る手を触れてみると、彼女の身体はひどく冷たかった。何時間も前から彼女が死んでいたことの、それは確かな証明だった。

台風圏聳えし東京タワーかな

コンテスト結果

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
01	プロジェクトMAX ー頂戦者たちー	10 pt	3 位	2 sp
		痛快表紙、映画の予告編のノリで。 スピード感抜群でしたね。ナイスナイス。 いっぱい遊んでね～というTAさんアシストでした。 おめでとうワニさん銅メダル!! そして、イチオシフレーズ8／10班、ほぼ総なめ状態というのもまた、なかなかの快挙！ 特別賞：NHK賞 by B班 結局何を作ったんで賞 by I班 イチオシフレーズ：「プロジェクトMAX」「君は大葉じゃない！バジルだ！」×3 「屈辱のあだな」「チーズが一番下じゃ傾いちゃう！！」×3		
02	狂気のトウ	2 pt	6 位	1 sp
		なるほど塔→病棟ですか。怖さは感じられたけれど、ほぼ同じ体験をしてるのにS介くんだけが行ってしまわれた理由が謎。教えてくださいな。 特別賞：卒トウ賞 by D班		
03	夏の終わりと塔の終わりと僕らの始まり	3 pt	5 位	2 sp
		東京タワーそっちのけ。でも、ほのぼののフォントでしあわせの演出、いい読みごちです。 ちなみにラスト。かけがい→かけがえ キメフレーズの部分なので、ご用心。 特別賞：こんな恋がしたいで賞 by C班 バカで賞 by G班		

04	象牙の塔	2 pt 6 位 0 sp	こ、こ、こんなにも「象牙の塔」を知らない人が多いとはっ！ いいタイトルなのになあ。 ただ、なかみはもっと練れるでしょう。あまりにたんたんとした筆致で、孤独な発明者さんの苦しみや狂気が伝わってこなかったです。
05	Pictures of…	21 pt 1 位 1 sp	泣かせます。 この作者さんは、人を泣かせるのがお好きなようです。 語り口ですいっと読み手をつかまえて一挙にさいごまで。ほんと、うまいなあ。 さあみんな、これは始まりに過ぎない。初回金メダルですっかり天狗になった彼を倒すんだ!! 特別賞：「……む」賞 by F班
06	空を守る塔	12 pt 2 位 0 sp	塔＝神かな。信ずればそこに確かに存在し、ひとびとの心の支柱となる。 神が死んだ不幸。そんな寓話として読みました。 じっくり読み込んでね～というT Aさんアシストでした。おめでとう銀メダル!! イチオシフレーズ：「本来の役目なんて関係なしに」
		10 pt 3 位 0 sp	

07	報復	長いよー。怖さは伝わってきたけど。 もっと見せ場をしばらくこんで、この半分くらいで、行間に語らせる展開にすると、より凄みが備わると思いますよ。 よく分からない、そのこと自体が読み手の恐怖感を煽るかたちになれば怪談話の勝ちなので。 それでも、作品数が少なかったおかげもあって、ちゃんと読んでもらえましたね、おめでとう銅メダル!!
08	台風圏	0 pt8 位4 sp 台風にも負けずに、というイメージでしょうか。 なかなかシュールな風景が、ぼうっと脳裏に浮かびました。最多特別賞です、おめでとう!! 特別賞：いとおかし賞 by A班 ゴジラには負けません賞 by E班 読めないで賞 by H班（そびえるが読めない）ベリー賞 途 by J班 イチオシフレーズ：「東京タワー」